

規模を縮小し 3年ぶりに開催

おおがわらふるさと花火

8月13日、「おおがわら夏まつり」の規模を縮小し、新型コロナウイルス感染症の収束と地域経済・産業・観光の1日も早い回復、町民の皆さんのご健勝とご多幸を祈念した「おおがわらふるさと花火」が3年ぶりに打ち上げられました。

今回は、打ち上げ会場を白石川河川公園に変更し、新型コロナウイルス感染防止の観点から、打ち上げ会場の周辺は無観客での開催となりましたが、午後7時からおよそ20分間、華やかな花火が大河原の夜空を彩りました。



大河原紅桜



『千本桜を千年先へ』

～つなげ！

一目千本桜を

未来に～

『千本桜を千年先へ』
日本花の会から認定を受けた「大河原紅桜」を白石川右岸サイクリング・ウォーキングロード盛土駐車場に植樹しました。
来年、一目千本桜の植樹から100年が経ちます。現在の一目千本桜はソメイヨシノですが、その樹齢は一般的に60年から70年。寿命を大きく上回る一目千本桜は、これからも咲き続けてくれるのか心配されています。
そのような中、誕生したのが「大河原紅桜」。町の樹木医である尾形政幸先生が、樹勢が強健で、病害虫に対する抵抗力が高く、寿命が長いソメイヨシノ型の桜を作ることを目的として、ソメイヨシノを母親にエドヒガンを人工交配させ、8年の歳月をかけて誕生させた桜です。現在のソメイヨシノが寿命を迎えても、大河原紅桜が一目千本桜として受け継がれ、町が誇る絶景を未来へつなぐことができます。
大河原紅桜は、新たな町のシンボル、そして財産として、皆さんに広く愛される存在になることでしよう。来年春の開花を心待ちにし、ゆっくりと愛でてみませんか？
そして、一目千本桜を千年先へ皆さんでつないでいきましよう。



▲園芸品種認定証と尾形政幸先生
2022年4月22日、公益財団法人日本花の会より新品種の認定を受けました。認定日は大河原町のシンボル「一目千本桜」の生みの親である高山開治郎氏の誕生日です。



▲大河原紅桜の植樹の様子と植樹場所
来年春には、薄ピンク色（一重咲き）の花が咲く予定です。

樹木医尾形政幸先生に「大河原紅桜」について伺いました
地元農業高校で学び、母校に勤務する中でセンダイヨシノという桜と出逢い魅了されていきました。新品種がもたらす恩恵を知り、「新しい桜」に着目しますが、資料も少なくセンダイヨシノの開発者が記した「仙臺吉野と櫻の培養」を手に独学で育種を始めました。
その12年後、私は名取市の農業高校にいました。近くの山に野生する桜から花粉をとり校舎前のソメイヨシノと交配するとその年3つの果実を付けました。
この中の一つが8年後に誕生した大河原紅桜で、遺伝子をソメイヨシノの片親の方に戻すことでソメイヨシノよりも強健になりました。名前に「大河原」という文字を入れたのは誰からも愛され、一目千本桜を構成する桜になってほしいという願いがあったからです。
私かなぜそこまで桜に執着しているのか、その理由は「桜の持つ力」にあります。特に東日本大震災の浸水地域での桜の植樹活動は家を失い生きる希望をなくしていた人達が次第に笑顔を取り戻し、さらに私自身も勇気を頂いたからです。今度は大河原で笑顔の花を咲かせたいと思っています。